

---

# 雪の冷たさ、温かさ

黒猫乃ノラ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

雪の冷たさ、温かさ

### 【Nコード】

N0640D

### 【作者名】

黒猫乃ノラ

### 【あらすじ】

冬になれば、延々と雪が降り続ける町で。高校生になった私、梁瀬伊織はもう一人のヤナセイオリに出会った。それまではただ冷たいと感じるだけだった雪なのに。彼と出会ったことで、温かく感じられるようになっていた。そんな、心温まる恋物語。

・ p r o l o g u e ・ (前書き)

ギフト企画参加作品です。

「ギフト企画」「クリスマス」で検索をして頂ければ、他の参加者様の作品も読めます。

ぜひぜひ読んでみてください

雪の冷たさ、温かさ

- prologue -

「お願いします……どうか、庵君いおじを助けてください……」

ぼさぼさと大き目の雪が降る夕暮れに。

私は何度、こうして神様をお願いしたんだろう。

拝殿の横にある木の枝にくくりつけたこよりを見してみる。

十本ごとに分けて、それが四つあって、下に五つ。

つまり、四十五回お願いしたことになるのかな。

「……寒い」

声と共に白い息が吐き出される。

白い息はすぐに消え、目の前には降り積もっていく雪しか見えなくなる。

じっとしていたらそのまま埋もれてしまいそうで。

雪化粧された神社は、鳥居がなかったら神社であることすら分からないほど、元の色を失っていた。

でも、目の前に広がる光景はあまりにも幻想的で。

私はここに来た目的を何度か忘れそうになってしまう。

「……頑張らなきゃ、ね」

自分を奮い立たせて、なんとか足を動かす。

寒い。

冷たい。

足の感覚が無い。

家に帰りたい。

もう終わりにしてしまいたいよ。

また、そんな弱気なことを考えてしまった。

終わりなく降り続ける雪のように、私に降りかかる負の感情。

頭を振って余計な考えを全て捨てて、私はただひたすらにここを往復する。

そして神様にお願いはかりをしていた。

「お願いします。どうか、庵君を助けてください……」

何度も繰り返ししているお願いをし、拝殿の横にある木に向かう。

ポケットに手を入れ、こよりを一つ手に取る。

手袋を着けているとこよりが上手く結べないから、最初から外してしまっている。

おかげで指を動かすだけで痛いよ。

かじかんだ手は、もう感覚がなくなりつつある。

やっとの思いでこよりを木の枝にくくりつけて。

これで、四十六回目。

一つの枝に十本ずつつけたこよりは、雪の白さと同調して見えにくくなっている。

でも、十本ずつ分けたんだから数えるのは楽だよな。

へへ……我ながら良い考え。

うん、こんな風に考えられるんだから、まだ大丈夫。

でも制服のままここに来たのはちょっと後悔かな。

スカートだし、ジャケットの上にはマフラーだけだし。

群青色の制服はどんどん白く染まっていく。

私自身が周りの景色と同調していくように白くなるにつれ、寒さも増してくる。

足だけだった震えも、今では全身に及んでしまっている。

「お母さんは素足でやったんだし、お婆ちゃんは何度もやったんだから。負けられないよね」

何度も自分を奮い立たせて、再び百度石の前まで歩く。

ゆっくりと拝殿まで向かい、手を合わせ、またお願いをする。

「お願いします。どうか……どうか、庵君を助けてください！」

大声でお願いもしてみる。

痛いけれど、手を叩くのを強めにしてみたりもした。

でも喉が痛かったり、手が痛かったりするだけで。

神様は何も反応してくれなかった。

「よんじゅう……七回目」

こよりを結びつけ、また再び百度石の前まで戻る。

雪はどんどん積もっていくが、私が歩いた道だけが土で汚れていった。

空を見上げてみれば、薄暗い雲が無限に広がり、雪を降らせている。

まるでこの町全体を雪で覆いつくしてしまうかのようだ。

ひたすらに、ただ、しんしんと。

服の上からも身体の熱を奪うほどの寒さ。

顔に当たる雪も、服の上に積もる雪も、拝殿の上に降る雪も。

ただただ冷たいばかりだった。

そんな中、私は延々と同じ事を繰り返していた。

雪の冷たさ、温かさ

雪道を歩き、御参りをし、お願いをし、こよりを結びつけ、また  
戻る。

ただ、一人の名前を。

やなせいおり  
柳瀬庵という人の名を想いながら。

「ヤナセイオリ」

「はい」

「はい」

高校の入学式のクラス分けの時には気付かなかった名前。

彼の名前は柳瀬庵やなせいありで、私の名前は梁瀬伊織やなせいありだった。

初めて出席を確認する先生に名前を呼ばれて、私たちは同時に席を立ててしまった。

それが、同じ「ヤナセイオリ」である私と彼が初めてお互いを認識した時だった。

思えば、その時から私たちはちょっと特別な関係だったのかもしれない。

同じクラスで名前が同じだから、席順は同じだったし、班も同じになることが多かった。

クラスの友達からはやんやんやと持て囃はやされることもあった。

その頃から私は柳瀬庵という人物を意識しなくなりだった。

私は外見も普通だし、特に目立つような子でもない。

強いて言えば、男勝りな性格が私の個性なのかもしれない。

でも、ただそれだけ。

本当にどこにでもいるような女の子だった……と思う。

だから、恋愛の話で噂されるなんて、そんなことは経験しなかった。

名前が同じだけ、っていう理由で持て囃されるのアレだけ。

けれど、私はその頃から彼のことを意識してしまっていたのだった。

た。

優しい顔立ちから女子からの人気も高かった「ヤナ男」の彼。

ごく平凡な、ただ男勝りな性格だけだった「ヤナ子」の私。

先生が区別するためにつけたそのあだ名が、私は凄く嫌だった。

だって、どう考えても「嫌な男、嫌な女」に聞こえてしまうから。そういう意味では、私は彼のことを最初は悪い意味で意識していたかもしれない。

同じ名前であるが故に、理不尽な思いばかりさせられて。

だから、一年生の頃は私はヤナ男くんとはあんまり話さなかった。というよりも、話せなかったのかもしれない。

でも、それは彼も同じだった。

そのことに気付いたのが、二年生の時だった。

『二年C組の梁瀬伊織さん、職員室まで来てください』

校内放送で呼び出され、職員室まで足を運んだある日。

何故かそこにはヤナ男くんが居た。

二年になったらクラスが別れたから、こうして会うのも久しぶりな気がする。

でも会うとやっぱり意識しちゃうのは一年の頃の後遺症なのかな。

「あ、ヤナ子さん」

私の姿に気付いた彼が話しかける。

優しい笑顔が相変わらず印象的。

確かに女子の私から見てもイケメンの部類に入るかも。

でも、それ以前に私は彼に言っておきたいことがあったのだ。

「あのさ、その呼び方もう止めない……？ お互いに嫌でしょ、ヤナ男とヤナ子なんて呼び方」

そう、この呼ばれ方。

今まで先生含めごく一部の人からしか呼ばれていないけど、いざ呼ばれるとやっぱり嫌な気分。

「というかセンスないよ、先生。」

「でも、僕は柳瀬で呼ばれているからね」

終始のほほんとした口調で話すヤナ男くん。

なんかイメージと違うかも。

外見からのイメージだと、もっと丁寧かつ爽やかで、こっ……清々しい感じがしたのに。

「私だって伊織って呼ばれてるわよ」

「じゃあ、伊織」

「ちよっ、なんでいきなり名前で呼ぶのよ?! しかも呼び捨てで！」

伊織、という言葉聞いて私は思わずドキッとしてしまった。

だってお父さん以外の男の人から名前を呼び捨てで呼ばれたことはないから。

全身が熱くなってしまうのが嫌なくらい分かる。

きつと顔は真っ赤なのだろうけど、それどころではなかった。

「だってそう呼ばれているでしょ?」

「女子からだけ! 男は気安く女子を名前を呼び捨てで呼ぶもんじゃないわ」

「ふーん」

ふーん……って、何、この独特のテンポ。

クラスの男友達とはどこか空気が違う。

ていうか……不思議ちゃん?

でも、今にして思えばそれが彼とまともに話した初めてのこともしれない。

優男のイメージしたなかったけれど、意外と変な雰囲気バリバリの不思議君だった。

「あ、伊織さん」

呼び捨てではなくなったけれど、やっぱりドキドキしてしまう。ていうか何でまだ伊織って呼ぶかなこの男イオリは。

「な、なにさ」

平静を装いつつも、内心はドキドキしっぱなし。

実は初心はつこころな私にちよつと自己嫌悪だよ。

「なんでここにいるの？」

「呼び出されたの。二年C組の梁瀬伊織さんってね」

「ふーん。同じだね」

そう言っつて、なんでこの男イオリがここにいるのか分かった気がした。

もしかして自分が呼ばれたと勘違いしたんじゃないのかな。

でも、校内放送では確かに二年C組って言っていたから、呼ばれたのは彼じゃない。

「柳瀬君は確かB組みでしょ？」

「うん」

相変わらずのほほんとした空気を放ちながら頷く。

ひよつとしたら何も考えていないんじゃないか、とも思えてしまうほどのほほんとしているよ。

「じゃあ、どうしてここにいるのさ？」

「え、さつき二年C組の柳瀬庵さんって呼び出されたから」

なんだ、ちゃんと呼ばれたのが自分じゃないって分かってるじゃん。

……あれ？

「じゃあなんでここにいらっしゃる。」

「やだなあ、伊織さん。呼び出されたの自分だと勘違いしたんでしょ？」

「……えーっと？」

何を言っているのかさっぱり。

いま、自分で二年C組って言ったよね？

それ以前に自分はB組だって言ってたよね？

「いや、呼び出されたのは二年C組の梁瀬伊織。つまり私だよ？」

「いや、呼び出されたのは二年B組の柳瀬庵。つまり僕だよ。」

待って、待って。

頭が混乱してくる。

ジュースでも飲んで落ち着こう。

カバンの中に……あった、ポカリウォーター。

落ち着くにはこのクエン酸がなんとかも。

「あは。飲み方可愛いね、伊織さんは」

「ぶ　っ?!」

彼との会話は、いつもこうだった。

不思議系と思っただけど、違う。

この人、ただの変な人だった。

優しそうな、凜々しい顔から生まれたイメージは既に崩壊していた。

でも衝撃だったのは、その後にも続いた。

私と彼は偶然にも二人欠員が出て、補欠を探していた生徒会に入れられてしまったのだ。

「おう、梁瀬。お前だけ何の係りにも委員会にも入っていないから生徒会な」

「はい？」

とりあえず私を呼び出した担任の先生に言われた一言。

「おう、柳瀬。ついでにお前も生徒会入るか？」

「はい」

何故か後ろを付いてきた彼に言った先生の一言と、彼の了承の言葉。

「うし、<sup>ダブル</sup>Wヤナセで欠員補充無事完了つと」

そして呆然としていた私に言った先生の一言。

そのどれもがあまりにも衝撃的過ぎて、その後のことは良く覚えていません。

ていつか急展開過ぎて数日は混乱しっぱなしでした。

とにかく、気が付けば私と彼は生徒会に入れられていたのだ。

気が付けば生徒会に入らされて約一ヶ月が経って。

季節は、町に一日中雪が積もっている真冬の時期になっていた。

生徒会での役職は、私が副書記で彼は副会計。

役職的に仕事なんて全くと言って良いほど無かった。

ていうか副書記と副会計っていう役職の存在意義が分からないよ。

生徒会で集まっても暇でしようがないから、同じ暇な状態にある

柳瀬君と話す。

そんな日々が一ヶ月も続いた。

おかげで彼ののほほんとした独自のテンポにも慣れ……てきたと思う。

伊織さん、って呼ばれ方にはまだドキドキしちゃうけど、それ程意識せずに話せるようにはなった。

話してみれば良い人だし、何より他の男子とは違う雰囲気か印象に残る。

時たま変なことを口走るけど、それが個性だと思つとなんだか可愛くも見えてくる。

話す時間が増えるにつれ、私は柳瀬庵という人物をどんどん知つていった。

そうした日々を過ごす間に。

いつの間にか、私の中では彼という存在は男友達というカテゴリから抜けていた。

けれど、まだその時は漠然とした存在で。

はつきり言えば良く分からない存在だったけれど、楽しさに身を委ねる毎日だった。

でも、何よりはつきりとしてたのは。

彼といて凄く楽しかった、ということ。  
安心も出来るし、何より一緒にいて心地よかった。  
心の中にあるモヤモヤとしたものを忘れてしまっただけ。

「伊織さんってさ、双子座なんだよね？」

「うん、やっぱり私のことを名前で呼ぶんだよね。」

話すようになって一ヶ月になるけれど、やっぱり慣れない。

名前で呼ばれるとドキドキしちゃっ初心的な私にまたちょっぴり自己嫌悪。

「うん、柳瀬君は？」

「僕も双子座。伊織さんの49時間と16分後に産まれたんだ」

「細かつ！ ていうか何でそんなこと知ってるのさ?!」

その日も、生徒会の集まりの帰り道。

いつもの、ちょっと独特の雰囲気を出しながらの会話をしている。

はつきりとしらない私と彼の関係に変化が起ったのは、その時だった。

「伊織さんも双子座で、僕も双子座。なんかこれ、運命みたいだね」

「そう？ 同じ星座の人なんていっぱいいるから運命ってのは大袈裟だと思うけど」

「それは、他の人たちだけだよ。僕と、伊織さんだと運命に思えるんだ」

さつきから彼が連呼している運命ってという言葉。

その言葉を聞くたびに、何故か私の胸は高鳴ってしまっただけ。

「これって、私と彼が運命の赤い糸とかっていうことを私自身も意識して……いやいやいや。」

「ねえ、だから僕は伊織さんのことが好きになっただけだと思っ」

「ふーん」

彼の口癖を真似ていたら、いつの間にか私も使うようになっていた「ふーん」という言葉。

私は、ただ相槌としてそれを使っていた。何を言われたのかも分からないまま。

「好きだよ、伊織さん。僕は君のことが好きなんだ」

好き。

好き……？

好きっ？！

「ちょっと、好きってあなた……うえっ?!」

「最初はね、同じ名前で色々からかわれて嫌な思いもしたんだ。だから、やだなーって感じて君を見ていたんだ」

「……」

「でも、一年の頃から伊織さんを意識していたのは確かだったんだ。それは私も同じだった。

同じ名前というだけでやたらと騒がれて。

先生からも変なあだ名付けられて。

始めの方は、悪い意味で彼を意識していた。

そっか、彼も同じだったんだ。

「それから、生徒会に入っつて。君と話すようになって、君と一緒に帰るようになって」

何も言えなくなっている私をよそに、話し始める彼。

私は俯きつぱなしで彼の言葉を聞いていた。

「梁瀬伊織ってという人のことを知っていくにつれて、僕は変わっていった」

私が考えていたのと同じことを、彼は言っている。

最初は悪い意味で意識している。

けれど、生徒会に一緒に入って、それから良く話すようになって。私の中で、彼に対する意識は変わっていった。

「凄く楽しくて、凄く充実している。でも、楽しいってというのは、嫌いな人とじゃ生まれぬ感情だから」

楽しい。

それは私も凄く感じていることだった。

彼と話すようになって、毎日が本当に楽しくて仕方がなかった。

「だから、僕は自分の感情に気付いたんだ。ああ、僕は君のことが好きなんだ、って」

「……………」

彼も緊張しているのか、咳を一つ入れてまた口を開く。

「だから、僕と恋人として付き合っただけ欲しい、伊織さん」

「っ」

いつの間にか、雪が降り出していた。

私と彼は、雪が降り積もる中、ただただ立っていた。

私は、突然の告白に戸惑ってしまっていた。

彼は、私の返事を待っていて。

私は目を瞑り、なんとか言葉を探そうとする。

好きなのか。

好きじゃないのか。  
私の、彼に対する気持ち。

何も分からないままだった。  
頭は混乱し、もう何も言えはいいかも分からない。

眼を瞑っているのも嫌になって、私は目を開けて彼に告げようとした。

分からない。

そう、伝えようとして。

「あの、私」

そこに、彼はいなかった。

彼がいたところには、何故か車がいて。

彼は元居た場所とは程遠い場所に、雪に埋もれるように倒れていた。

白い雪が赤く染まっていた。

その上にまた白い雪が降り積もっていく様子が、ただ印象的で。

私は自分の身体に雪が降り積もっているのも気付かずに、ただそこに立っていた。

雪の冷たさ、温かさ

一連の流れが理解できないまま。

ふと気が付けば、私は病室にいた。

目の前では彼が眠っていて。

頭には包帯が巻かれ、腕には管が通され、機械の音が部屋の中に響いていた。

私の隣では彼の家族が涙を流して嘆いていた。

父親であろう人が、医者に現状を問い詰めていた。

「今夜が山場」

「出来る限りのことはした」

「後は、彼の生命力次第」

「意識が戻らない場合や、後遺症が残る可能性も」

「後は、神頼み」

そんな言葉ばかりが響き渡る。

聞きなれない言葉を聞いていくうちに。

彼が、死んでしまうかもれない。

そう考えるようになってしまう。

家族の誰かが「信じて待ちましょう」といった。

嫌だ。

ただ、彼が目覚ますか覚まさないか分からないまま待つなんて。

何より、彼を失ってしまうということが怖かった。

何人かの人はもう諦めているような顔を見せている。

「冗談じゃない。

いても立つてもいられないとは、たぶんこのことなのだろう。

私は立ち上がると、病室を飛び出していった。

後ろからは誰かが驚きの声をあげていたが、かまわない。

病院では走っていけないらしいけれど、そんなの知ったことではない。

駆け足のまま病院の外に出る。

途端に、ぼさぼさと雪が私の身体に降り注いでくる。

かまうものか。

傘も差さずに、私はただひたすらに走った。

私ができること。

昔、お母さんとお婆ちゃんに教えてもらった、私に出来ることをするために。

「はあ、はあ」

雪の冷たさも吹き飛ばすくらい、走ってきた。

坂道では滑って転んだし、焦ったせいで道も間違えた。

そしてやっとの思いで着いたのが、地元ではお百度参りで有名な  
氏神社うじがみだった。

夕暮れの茜空は、町を覆う雲で消えてしまっていて。

神様が居るはずの神社は、やけに薄暗く感じられた。

この神社には、今でも伝えられている逸話が数多く残されていた。

大昔、長い間干ばつで飢餓起こった時に恵みの雨をもたらしたとか。

不治の病の人を助けてくれたとか。

行方不明だった肉親に会わせてくれたりとか。

そんな話しがいくつも残されており、神社の一画には感謝の言葉が多く寄せられていた。

そして私も、この神社に何度も助けてもらっていた。

昔、私が原因不明の高熱で何度も生死の境を彷徨っていた時。

お婆ちゃんが私の病態が悪くなるたびに、この神社にお百度参りをしたのだという。

お父さんが難病でもう助からない状態だと告げられた時。

真冬なのにも関わらず、お母さんが素足でこの神社にお百度参りをしたって聞いた。

私もお父さんも、今でも元気に生きている。

どのお医者さんも「奇跡だ！」って言っていた。

お母さんは「困った時は、神頼みが一番よ」って言っていた。

お婆ちゃんは「神様も、心からお願いをすれば聞いてくれるよ。

お百度を踏むようにね」って言っていた。

笑いながら言っていたその言葉が、今の私にはとても心強く聞こえていた。

何もしないままでする後悔だったら。

何かをしてする後悔の方が良い。

今、私は彼のためにしてあげられること。

それが思い付かず、困っている。

困っているのだから、神頼み。

「庵君を助けて」というお願いも、お百度を踏むように強く願え

ば神様も聞いてくれるかもしれない。

無理やりなこじ付けだろうけれど。

今の私には、彼にしてあげられる何よりのことだと思えた。

「百回……御参りして、お願いをして……」

目の前に立てられている百度石の横には、お百度参りの手順が書いてある看板がある。

百度石から拝殿までを十三歩で歩き、御参りをし、お願いをし、そしてこよりを木に結ぶ、か。

看板の横には、小さなお堂があり、そこには無数のこよりが置かれていた。

私はあるだけのこよりをポケットに入れ、百度石の前に立つ。

拝殿までの道のりは雪で真っ白になっている。

この神社ですらも、全体が雪で白くなりつつある。

「 よしっ」

自分で頷いて、ざく、ざくと音を立てて歩き出す。

その度に革靴が濡れていく。

靴下もすぐに冷たくなり、足に寒さを強く伝える。

一歩、また一歩と歩いて。

十三歩まで数えながら拝殿までの雪道を歩く。

ゆっくりとした足取りで拝殿まで辿り着き、一息を吐いて御参りをする。

「お願いします……どうか、庵君を助けてください」

心の中でも何度もそう願う。

何度も何度も繰り返し、その言葉を少しでも神様に伝えるように。それから、拝殿の横にある小さな木に向かう。ポケットからこよりを一つ取り出す。手袋をしたままではこよりは結べないので、外しておく。途端に手が寒さを感じ、冷たくなっていくが、かまわない。慣れない手つきでこよりを木の枝に結び、また百度石の前まで戻る。

「……これで一回目」

あと、九十九回。

その言葉を声に出さずに発した瞬間に。

私の心の中では、彼への答えは既に決まっていたことに気付く。

私は、柳瀬庵という人が好きだ。

失ってしまうかもしれない、そう考えるのも怖いくらい。

いなくなつて欲しくない。

いつまでも、ずっと私の側にいて欲しい。

それは、楽しいからじゃなくて。

私が、彼のことを好きだと思っているから。

「よしー！」

強く頷いて、私はまた歩き始める。

大丈夫、私とお父さんを助けてくれた神社だもの。

「困った時は、神頼みが一番よ」

「心からお願いをすれば、神様も聞いてくれるよ。お百度を踏むよ

雪の冷たさ、温かさ

うにね」

笑顔で話すお母さんとお婆ちゃんを思い出しながら。

「あは。君もヤナセイオリなんだ」

彼の優しい笑顔を思い出しながら。

私は、また雪道を歩き始めた。

「吐く息は白く染まり、私の身体も雪で白く染まっていく。

一回目から、どれくらい時間が経ったのだろうか。

降り積もる雪は白でなく、着ている制服のように群青の色に変わって見えた。

寒い。

身体を動かすだけで痛みが走る。

冷たい、という感覚さえも分からなくなってきている。

全身も悲鳴をあげているのだろう。

こんな雪道をひたすら往復しているのだから。

いま、何回目の御参りだっけ。

「はちじゅう……なな」

あと十三回、御参りをしなくちゃ。

やだなあ、なんか不吉な数字みたいだよ。

立ち止まっているだけでも、雪は構わずに降り続ける。

足元は真っ白に染まり、お堂も屋根も元の色を隠されて真っ白になっっている。

見上げる空はさっきよりも暗くなっっている。

まるで私の気持ちを表しているみたい。

誰よ、お百度参りなんて考えたの。

本当にこれで庵君が助かるのかな？

私がこんなことをしても意味ないんじゃないかな？

湧き上がる思考は、どんどん負の方向へ行っている。

分かっているのに、その方向が修正できない。

どんどん嫌なほうへ、考えたくない方向へ。

「……あれ？」

気が付けば、私は雪に埋もれていた。

どこかで転んだのだろうか。

地面に雪が積もっているせいで痛くなかったのかな。

まるでベッドに突っ伏したような感覚。

凄く、疲れた。

眠りたいよ。

このまま、雪に埋もれたままでも良いから。

目を瞑ってしまえば、そのまま夢の中にいけそうだよ。

「ダメだよ……あと十三回御参りしなきゃ……」

口に出して、自分を奮い立たせる。

何度もそうやって頑張ってきた。

けれども、今度ばかりはそうもいかなかった。

身体が動かないし、何より自分自身が動こうとしなかった。

その間も雪は降り続け、積もった雪と私を同化させる。

群青の制服も、どんどん白に染まっていく。

身体中から感覚がなくなっていく。

冷たさも分らないし、むしろ温かくなってきた。

雪が温かいなんて、なんだかおかしいよね。

なんだか……雪が私を抱きかかえてくれているみたい。

それがとても心地よくて。

私は、それきり考えるのをやめてしまった。

身体を包み込む温かさに、全て委ねてしまった。

目を瞑り、暗闇の世界に身体を投げ出してしまった。

目を覚まして、一面は真っ白だった。

雪は降り続けたままで。

けれども、私を包み込む雪はまだ温かいままで。

「あー……ついに死んじゃったのかな」

冗談で声に出して見て、私がまだ生きていることを自覚する。

じゃあ、なんでこんなにも温かいのだろう。

「死んでないよ、君は」

ふいに、声が聞こえた。

後ろから私に呼びかけるように。

「でも、雪がこんなに温かいなんてちょっとおかしいよね」

「あは。相変わらず可愛いね、伊織さん」

「うるさいよ。じゃあなんでこんなに温かいのさ」

「たぶん、僕が抱きしめてるからじゃないかな？」

「ふーん」

そうね、それなら納得できるかも。

雪じゃなくて、庵君に抱きしめられているなら温かいよね。

それにしてもこれってどうせ夢の世界なんですよ。

大体こういうパターンは目が覚めたら天国っていうオチだよな。

病院にいる庵君がこんなところにいるはずないもの。

そういうことは庵くんと私は死んじゃったのか。

あー、展開が急すぎてついていけないよ。

「ねえ、伊織さん」

庵君が話しかけてくる。

夢の中だから自分の妄想が具現化されちゃってるのかな。

それにしてもリアルな夢だけどさ。

でも、夢にしてはちよつと変なんだよね。

なんだか、身体もまだ温かいままだし。

それに、伝わってくるものがあつたから。

「君の返事、まだ僕は聞いてないんだけど」

伝わってくるもの。

それは、彼の鼓動。

とくん、とくんと音を立てて。

私の全身にその音が伝わってきていて。

「その前に、一つだけ聞いて良いかな……？」

「うん、良いよ」

「これって、夢じゃないよね？ 私と庵君、死んでないよね？」

すると、身体が強く締め付けられて。

もっともつと温かくなつて。

「温かいつていうのは、生きていることなんだよ。大丈夫、これは

夢じゃないから」

「うん、うん」

「ほら、泣いてないで返事を聞かせてよ」

「うるさいよっ………！ 感動の場面なのにそんなこと聞いて！」

「あは、元気だね」

「バカ」

「うん？」

「バカだよ、庵君は」

「それが返事？」

「バカ！ 違うよぉ！」

そういつて、私は抱きしめられている庵君の腕に手を添えて、握り締める。

そこに庵君がいるということを確認するように、強く、強く。

すると、手の温かさが私の手を通して、まるで全身が温かくなるみたいで。

顔が赤くなるほど、私の全身がぼかぼかしてきて。

そして、私は言った。

「……私も、庵君のことが好き」

「それが、返事？」

「……うん」

それきり、彼は黙ってしまった。

でも、私に何かを伝えるように。

より一層私を強く抱きしめてくれて。

私たちは、降り積もる雪の中。

ずっと寄り添っていた。

周りに降り積もる雪は、すごく冷たいのかもしれない。

でも、私たちに降り積もる雪は。

ぽかぽかしてて、すごく温かくて。

包み込まれる温かさは、とても心地よかった。

雪はまだ降り続いていて。

私と庵君が入院している間も、ずっと町を真っ白に染めていて。

私たちが退院して病院から出てくるときも、まだ雪はしんしんと降っていた。

「凄いな、この町の雪って」

「うん。全部埋まっちゃうかもね」

私と庵君は、揃って病院から出て行く。

握られている手が、外の冷たさを感じさせる。

庵君は、あの時雪道でスリップした車に撥ねられてしまって。

雪が積もっていない地面に頭を強く打ち、意識を失ってしまった。

私が呆然としている間、車の運転手が救急車を呼んで病院に搬送されたのだという。

それから急に意識を取り戻し、家族が驚いているのをよそに病院を飛び出していったとか。

そして私は、あの神社で雪の中に長い間居たせいで本当に危なかったらしい。

後で聞いた話だと、庵君より私の方が重症だったとか。

その後、私は目が覚めたら病院のベッドの中にいた。

隣のベッドでは庵君がああ優しい笑顔で「おはよう」って言うてくれて。

あの雪の中の出来事が夢じゃないことを改めて教えてくれた。

「あ、そうだ。一つ聞いておきたいことがあるんだけど」

「うん？」

「どうして私があ神社にいたことが分かったの？」

「僕、超能力者だから」

「ちょ……ますます気になるじゃない！」

「あはは、愛の力だよ」

「バツ　！　なんでそんな恥ずかしいこと平気で言っかな……」

「ほら、早く行こうよ！」

そう言っ、庵君は私の手を握りながら走り出す。

「うわっ！　危ないってば？！」

当然、手を握っている私も走り出す。

看護婦さんから「危ないですよ！」って言われているけど、かまわない。

だって、凄く楽しいし、何より幸せだったから。

「庵君！」

「うーん？」

走りながら、私は大声で庵君に呼びかける。

雪の冷たさ、温かさ

「やっぱり、愛の力かも！」

「ふーん」

「なっ……ふーんって！ 何でそんな反応なのさ！」

「あは。やっぱり可愛いね、伊織さんは！」

大きな声で話しながら、笑いあいながら。

私と庵君は、手を握ったまま走り続ける。

雪が降り積もる町の中を、ある場所を目指して。

「ふう、着いたねー」

「う……うん……疲れたあ」

私達は病院から走ってここまで来ていた。

そう、私がお百度参りをしていたあの神社に。

「五、六、七……。凄いね、八十七回もお願いしたんだ」

「うん、我ながら凄いなと思うちゃうよ」

木に括り付けられたこよりを数えながら、庵君はひたすら驚いていた。

実は私が一番驚いていたのかもしれないけど。

「それじゃあ……はい、こよりを十三個」  
「うん」

側にある小さなお堂から、こよりを十三個取り出し、庵君に渡す。神社の人が補充したのだろうか、その数はかなりの多さになっていた。

「途中からお願いが変わっちゃうけど、神様は聞いてくれるかな」  
こよりを手にしながら、庵君は呟く。

「大丈夫だよ。心から願えば、神様は聞いてくれるんだから」  
すると、庵君はまた驚いたような顔をして私の顔を覗き込んできた。

相変わらず初心なのか、私はまた恥ずかしくなって目を逸らしてしまう。

「伊織さんって、意外とロマンチストなんだね」

「……誰の影響だろうね」

笑いあいながら、私と庵君は百度石の前に立つ。

「じゃあ、残り十三回のお願いをしようか」

「うん」

柳瀬庵と、梁瀬伊織の二人。

二人のヤナセイオリは、手を繋ぎながら降り積もる雪の中を歩き始める。

雪は、冷たいままだけれど。

けれど、二人を包み込んでいるように温かくて。

雪に囲まれながら、二人はお堂までの道を十三歩で歩く。

雪の冷たさ、温かさ

手を叩いて、礼をして、揃って御参りをして。

ぎゅっと、お互いに手を繋いで。

お互い見つめあい、笑いあつて。

それから、声を合わせて神様にお願いをした。

「私、梁瀬伊織と」

「僕、柳瀬庵が」

「ずっと、二人で、幸せでいられますように」

・ e p i l o g u e ・ (後書き)

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます。

ギフト企画、ということなので心温まる恋物語を書こうと思いましたが。

クリスマスというものを物語に組み込めなかったのがちょっと残念です。。。

それでも、この小説を読んで何か感じて頂ければ幸いです。

クリスマスまでまだ一ヶ月ありますが、私からのギフト小説とさせていただきます

M e r y C h r i s t m a s

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0640d/>

---

雪の冷たさ、温かさ

2008年11月7日06時43分発行